

いすわ
居坐りのひ

杉本奈月

作品概要

翌年、劇団N₂は新作『居坐りのひ』を上演します。これは上演を重ねるたびに「更新」される舞台作品です。

——東京・中野区にあるアートスペースRAFTにて、四十五分間の男女二人芝居『居坐りのひ』を上演。

「人でなくなったもの」と「人でなかったもの」が流れ着いた「あの日」を舞台に、今はもうそこにはない人間の営みを描く。
ぼくはそこにきおを立てる、一度でも傾いてはいけない。だから血は流れるから、ぼくらはそこにいたいんだ。

世界の端っこ（もしくは中心）を見つめるような作品を発信する「いかだ辺境劇場」（NPO法人らふと主催事業）の上演作品に、書類審査により選出。

（二〇一五年五月十三日『居坐りのひ』上演記録より）

——そこへ生まれ落ち、実を食べることから始め。

次は「衣」に袖を通して人間の営みに寄り添ってみます。

次の『居坐りのひ』にも雨は降り続けています。

大雨になる日も、洪水になる日もあるかもしれませんが。

川がないので筏には乗りませんが、みんなと一緒に舟には乗るかもしれません。

そこから誰かが落ちてしまうこともあるかもしれません。

わたしはいち物書きとして世界の行く末を追っていきます。

わたしたちの手に負えない世界とわたしたちをつないでくれるのは、いつの日も人を象つたものだったはずです。

書かれた言葉はその触媒に過ぎませんから、あとはその言葉を口にする身体が必要です。

（二〇一五年三月十四日『居坐りのひ』出演者募集チラシ掲載文より）

——一方「わたしたち」は。

「わたし」がそこにいることをするために、ヒト、臓器、細胞、分子、そして空気と……

皮一枚を隔てた内側と外側にある「小さきものより生まれたことば」を人や物を透して具現化していく必要があります。

人は、人間は——二次的なところに居座ることで生きていることを実感します。

でも、そこに居座ったばかりに何かがなくなってしまうことがあります。

ただそこにある、死なないで「いる」ことを忘れてしまうときがあります。

本当は、本当のところは。

わたしたちは、もつと一次的な、あるいは〇次的なところで、人と人のあいだに求めているものがあるのではないのでしょうか。

お芝居であるということ、土の上に人がいるということ。

いつの日も隣りあっている向こう側から、わたしたちは、もう一度。

その存在を知るために、時を同じくして人と人間をそこへ居座らせてみます。

（二〇一五年二月二十八日『居坐りのひ』企画書掲載文より）

〔初演〕

二〇一五年五月十一日（月）〜十二日（火）

於 東京・東中野RAFT

作・演出／ピアノ演奏 杉本奈月（劇団N₂）

船乗り／落とし子 永富健大

人魚／歌歌い 加藤南央

舞台美術／ヴァイオリン演奏 秋山真梨子（劇団N₂）

舞台写真 小嶋謙介（dracom）

主催 NPO法人らふと

企画制作 劇団N₂

居坐りのひ

杉本奈月

登場人物

人魚／ニンギョ

船乗り／フナノリ

歌歌い

ヒヨドリ／鳥

シロヘビ／蛇

落とし子

岩礁だけが立ち並ぶ朝、日がそこに居座っている。

石でできた床や壁は、まだ夜の冷たさを纏まとっている。

人魚が岩の上に座っている。

足がない、人のかたちをした魚。

人魚はそこから降りられずにいる。

歌歌いが岩の下に座っている。

昨日まで誰かが身につけていた服と服と服。

たしかな湿り気をもって、そこに横たわっている。

フナノリ どうして死なないのですか

誰かの言葉が地面を伝う。

ニンギョ どうして死なないのですか

遠くからそれは落ちてくる。

ヒヨドリ どうして死なないのですか

シロヘビ どうして死なないのですか

そこというには遠すぎる、あそこから、それは落ちてくる。

みんな どうして死なないのですか

落とし子 どうしてそこにいるのですか

船乗り、そこに立っている。

いつの日か、雨はそこへ降っていた。

船乗り、水浸しになっている。

はじめからそうなっていたのか、雨のせいなのか、誰にもわからない。

でも、その手には竿が一本ある。

落とし子、空を見上げている。

そこから、もう何も落ちてはこない。
歌歌い、人の数を数えている。

落とし子 あなたはそこにいますか

船乗り、言葉をなくす。

落とし子 あなたはあの日あそこにいましたか

船乗り、沈黙を守る。

落とし子 ぼくを覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 わたしを覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 彼女を覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 彼を覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 ぼくの を覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 わたしの を覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 彼女の を覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 彼の を覚えていますか

歌歌い 忘れました

落とし子 ぼくはぼくらを覚えています

歌歌い 覚えていますか

落とし子 忘れました

歌歌い 今日までに口にした

落とし子 言葉はありません

歌歌い バンの枚数を

ニンギョ わたしは

落とし子 ぼくは

ニンギョ 彼らの口にされてしまうのでしょうか

落とし子 あの日を口にしない

歌歌い 覚えていますか

落とし子 忘れました

歌歌い 今日までに身につけた

落とし子 言葉はありません

歌歌い 服の枚数を

ニンギョ わたしは

落とし子 ぼくは

ニンギョ 彼らの身につけられてしまうのでしょうか

落とし子 あの日を身につけない

ヒヨドリ・シロヘビ そこから約一億五千万キロメートル

歌歌い あの日は遠いですか

落とし子 雨が降っていました

歌歌い あそこは遠いですか

落とし子 綿わたのような雲が広がっていました

ニンギョ そこに川が流れています

落とし子の服から、水が滴り流れていく。

落とし子 皮

ニンギョ わたしは泳ぎます

船乗り ぼくは船乗りです

ニンギョ わたしは泳ぎます

船乗り ぼくは泳ぎません

ニンギョ わたしは泳ぎます

船乗り ぼくは船乗りです

ニンギョ わたしはそこで息をしていますから

船乗り 海はどこにありますか

人魚、川へ飛び込む。

歌歌いは服の上に座っている。

地上には他に誰もいないのだろうか。

きつと木に絡みついていた蛇が、

きつと木に留まっていた鳥が、

みんな干からびては、そこへ落ちる。

その質量に、水は一滴も含まれていない。

人魚 あめ

歌歌い 雨

でも、昨日までは。

そこに雨が降っていた。

人魚 雨の日はこうして皮を被るの

いっしょにそこへ落ちないため

人としてそこに居坐るため

昔、誰かがそんなことをいっていたような気がする。
人魚、地面へ手を下ろす。

人魚 水をかく

人魚、水を掻いてみる。
もうそこに水はなく、

人魚 空をきる

人魚、空を切ってみる。
その手は空を切るばかりである。

人魚 手をください

人魚、手を下してみる。
今日は何も誰も起きないのだろうか。

人魚 地面をける

人魚、後ろをむく。

人魚 足がない

そこに船乗りがいる。
その手に竿を持っている。
ひとしづく、露が零れ落ちる。

船乗り 雨

人魚 雨

落とし子 あめ

落とし子、声が涵れる。

歌歌い 雨はもう降らない

人魚、船乗りを見つける。

人魚 雨はもう降らない

船乗り どうして

人魚 もうそこに誰もいないから

船乗り 本当に誰もいないのか

岩礁に引っかかった服だけがはためいている。

人魚 わたしがそこにいないことをあなたは

船乗り ぼくはひとりだ

人魚、首を傾げる。

歌歌い 一日が終わりをむかえる

人魚 それは

船乗り さお

人魚、さらに首を傾げる。

船乗り ぼくはそこにさおを立てる

人魚 立てる？

歌歌い 立てない

人魚、もう首を傾げられない。

船乗り 本当はそこへつくはずだったのに

人魚 立てない

人魚、立とうとする。

落とし子、立てない人魚を見ている。

鳥 空を飛ぶとか

蛇 地を這うとか

人魚 彼らはもういない

ヒヨドリとシロヘビ、返す言葉がない。

落とし子、沈黙する彼らを見ている。

船乗り、地面へ手を下ろす。

さおが倒れる。

人魚、船乗りを見る。

船乗り、水を掻いてみる。

もうそこに水はなく、

船乗り、空を切ってみる。

その手は空を切るばかりである。

船乗り、手を下してみる。

今日は何も誰も起きないのだろうか。

人魚 地面をける

船乗り、後ろをむく。

人魚 足はありますか？

船乗り 人だから

人魚 だから

船乗り あります

人魚 人でないなら

船乗り 人でなくともだいたいのものには足がある

人魚 もの

船乗り ひとりで立つことのできないものことです

人魚 たとえば

船乗り ぼくとか

人魚 あなたは人だから

船乗り だから彼らには足がある

人魚 彼らとは誰ですか

船乗り 言葉をなくしたもののことです

人魚 どうして言葉をなくすのですか

船乗り 言葉ではどうにもならないことがあった

船乗り、遠くを見つめる。

人魚、遠くを見つめる。

人魚 今日は日が高いですね

船乗り 海はどこにありますか

人魚 海は

船乗り いつしか誰もが海にかえるそうです

人魚 彼らは人ではないのですか

船乗り 彼らとは誰ですか

人魚 それはあなたが口にした言葉です

船乗り 何ですか

沈黙が降りる。

人魚 あなたも言葉をなくすときがありますか？

船乗り ぼくが言葉をなくすときは

ぼくではない誰かに息が吹きこまれるときだ

人魚 誰が吹くの

船乗り きみの知らない人

人魚 あなたは知っている

船乗り ぼくも知らない人

人魚 あなたも知らない人がいる
船乗り 知らない人はいくらでもいる

人魚 何人

船乗り 数えられない

ぼくはひとりだ

人魚 ひとり

船乗り ぼくらは世界をみんな知ってはいけない

人魚 どうして

船乗り あの日を何も知らないから

人魚 あの日

人魚、空を見上げる。

人魚 今日は日が高いですね

船乗り どうしておなじことを口にするのですか

人魚 何もなくなってしまうから

船乗り きみも？

歌歌い ぼくも

人魚 わたしも

歌歌い あなたも

人魚 何もない日は

船乗り ぼくは何もなくしていない

人魚 こうして見下ろしてもらおうの

落とし子 ぼくも何もなくしていない

人魚 わたしはあの日を見上げている

船乗り ぼくは彼女を見下ろしている

人魚 あそこから落ちてくるものをかぶる

船乗り いけない

人魚 ただ一度の熱をあげるから

歌歌い 上げる

船乗り 下ろす

人魚 その手を下ろさないでいて

眠ろうとしている

あの人

落とし子 いけない

歌歌い あの人といった

人魚 あげる

船乗り 上がる

ひとりで立つことができないまま

人魚 ほしいの

鳥・蛇 一億五千万キロメートル

歌歌い もう歩けない

人魚 死なないでいるには泳ぐこと
いつの日も

歌歌い 夜は更けるばかりで

人魚 みんながそうしていた夜

歌歌い わたしは土をうめる

人魚 三日の月

わたしは口にする

歌歌い 雨はもう降らない

人魚 どうして

歌歌い あそこから落ちてくるものを

人魚 被らないの？

歌歌い わたしは土をかえす

人魚 半分の月

わたしは身につける

歌歌い 白

ヒヨドリ わたしの羽をかえしてください

シロヘビ わたしの皮をかえしてください

人魚 わたしの鱗をかえしてあげてください

わたしの足を

人魚、船乗りを突き落とす。

人魚 かえしてあげられない

船乗り そこから約一億五千万キロメートル

ぼくはそこにいる

落とし子 人の

鳥 羽も

落とし子 鳥の

蛇 皮も

落とし子 蛇の

人魚 鱗も

落とし子 魚の

船乗り 足も

みんなあそこへいくには少し遠い

人魚 あそこ？

船乗り ぼくはそこにさおを立てる

一度でも傾いてはいけない

人魚 さおを立てないの？

船乗り どうにも立たない

人魚 足はありますか？

船乗り 一本

人魚 二本

船乗り 二本はありません

人魚 一本はどこにありますか？

船乗り どこかへ行ってしまったのかもしれない

人魚 どこ？

船乗り 二本が一本になってしまったのかもしれない

人魚 どちらもなくなっているのですか？

船乗り 足は一本では立ちません

人魚 それは足ですか？

船乗り 足です

人魚 歩けないでしょう

船乗り きみは歩くことしかできないのか

人魚 いいえ

船乗り きみは足の本数を数えたことがあるのか

人魚 いいえ

船乗り ぼくは二本の足がある

人魚 一本の足があります

船乗り もう一本がない

人魚 もう一本が

落とし子 一本が二本になってしまったのかもしれない

歌歌い 二つが一つになれなかったのかもしれない

落とし子 彼らはずっとそうして手をあわせている

歌歌い わたしとあなたの手を

落とし子 きみとぼくの手を

歌歌い あわせずにはいられなかった

落とし子 あの日あそこでぼくらが

船乗り・落とし子 あった

人魚 あった？

人魚、後ろをむく。

船乗り この世界ではだいたいのものが上から下へ落ちる

人魚 どこ？

船乗り あそこ

人魚 どこへ落ちていくの？

船乗り そこ

人魚 どこから落ちてきたの？

船乗り あそこ

人魚 みんなそこのないところから落ちていくの？

船乗り 彼らはもういない

人魚 わたしはそこにいますか

船乗り いません

人魚 わたしはあなたたちといっしょになりますか

船乗り なりません
歌歌い なりたいといい

その手は水をかき

その手は空をきり

その手をくだし

船乗り あの日が落ちる

落とし子 ぼくはあの日あそこから落ちた

船乗り 七日の月

ぼくはまだ満ちていない

人魚 どうして

船乗り どうにも立てない

人魚 どうして

船乗り どうにも立たない

人魚 どうして

船乗り ぼくは船乗りです

遠くへ人を乗せていくもの

人魚 どうして

船乗り もうそこには人一人いない

人魚 どうして

どうしてどうしてどうして

どこからか、流れついてきたものがそこに横たわっている。

人魚、それを船乗りへ投げる。

船乗り、地面へ埋められていく。

人魚、落ちていたさおを手にする。

その先を、船乗りの身体へむける。

人魚 こうして

船乗り ぼくのを手にして

人魚 そうして

船乗り そこへさそう

人魚 ささるかしら

人魚、さおをはなそうとする。

船乗り はなさないで

人魚 はなしたくない

船乗り 一つになるまでははなしてはいけない

人魚 はなしたいのはわたし

船乗り おなじものは

人魚 はなせないのはあなた

船乗り 一つとしてありえない

人魚 おなじものは二つもいらぬの

歌歌い わたしが一つでなく二つであることを

落とし子 きみははなそうとしない

歌歌い ずっと覚えてるからです

落とし子 きみが何もはなさないでいるのは

きみではない誰かが

きみの手をはなしてしまったからだろうか

人魚 手がなくとも

歌歌い わたしは一人で立ちます

わたしは一人で歩きます

人魚 そこに高いところがあれば上ります

そこに低いところがあれば下ります

船乗り あなたは立たない

あなたは歩かない

ずっとあの日の夜を泳いでいるだけだ

人魚 でもわたしは服を身につけています

彼らが被っていた

羽や

皮や

鱗や

そして

歌歌い どうにもならないみんなを

落とし子 あなたは今日そこにいますか

人魚 わたしはあの日の夜を泳いでいたい

人魚、岩礁の天辺へ立つ。

船乗りを見下ろす。

人魚 抱いてください

落とし子 それは人が口にする言葉だ

きみが口にしてはいけない

人魚 一人ではどこへもいきません

船乗り 「一人」ではないのだから泳いでいけばいい

人魚 わたしは彼らの服を

船乗り 人の皮を

人魚 身につけています

船乗り 被っているのだろう

人魚 その身の重さに溺れてしまうかもしれない

船乗り 海はどこにもありません

人魚 わたしはそこへ降りたいの

船乗り 降りてどうする

落とし子 どうにもならない

人魚 わたしは降りない
船乗り そこへ降りるのは誰だ

人魚 あなたが降ろすの
船乗り そこへ上れば

きみが落としたものとおなじに
ぼくはなってしまうのか

落とし子 おなじものは二つもいららないの

人魚 あれはひとりでに落ちた

船乗り きみの手がぼくを落とした！

船乗り、その手で人魚を、
人魚、その手で船乗りを抱きしめる。

人魚 まだ濡れているのね

船乗り まさか

人魚 身体は水でできていますか

船乗り もう乾いてしまっているのに

人魚 身体は土でできていますか

船乗り その手をはなせないまま

どれほどの日がたつていくのだろう

人魚 何もかもがいつしよになつて

いつの日かわたしたちはおなじになる

船乗り あの日はずっと遠くなる

日がそこに居座っているように

日がそこへ落ちていくように

ぼくはそこで立っていることしかできない

歌歌い ずっとそこで立っていればいい

落とし子 立って歩いて

船乗り ぼくは

落とし子 人はどこへ

船乗り ぼくはもう

ずっとそこで居座っている碑だ

人魚 わたしはそこにさおを立てる

一度でも傾いてはいけない

歌歌い あの人がそこにいたように

あの人があるそこへ立っていったように

どこよりも遠くへあるように

「い」の一つ先へあるように

人魚 そこにあるはずの言葉をわたしは知らないまま

落とし子 日が落ちようとしている

そこは小さな居場所

生きているものがそこに立っている
生きていたものがそこで眠っている
はじまりとおわりを同じにする一本の直線
ことあそこを分かち

そこに引かれている
彼らには到底はかれないもの

船乗り そこは小さな居場所

あの日は雨が降っていた

一本の直線がゆがむ

ことあそこを分かたれず

蛇行し

そして

落とし子 そこはいつしかの底

あそこで日が落ちないままでいる

こどもだったものもおとなだったものも

みんながいた遠いところ

そこに綿のような雲が広がっている

そこへ

みんな あの日は雨が降っていて

光が落ちる。

落とし子 落ちた

ふたり 落ちた

みんな 落ちた

暗闇の中、言葉だけがこだまする。

船乗り 何も見えない

遠くから誰かの足音が聞こえる。

水浸しになって歩いてるのは誰か。

人魚 あめ？

船乗り 雨

人魚 雨

船乗り あの日は雨が降っていた

人魚 あのか？

船乗り 日がそこで落ちないままでいる

ヒヨドリ 空を飛んでいた鳥も

シロヘビ 地を這っていた蛇も

歌歌い みんながそこへ落ちるといふなら

落とし子 ぼくはそこで傘を差す
何も被らないでいるために

人魚 人の皮を被ったところで

落とし子 それでもあの日は

人魚 わたしは

落とし子 ぼくらを

落とし子、傘を落とす。

人魚 誰がいるの？

人魚、後ろをむく。

人魚 誰がいないの？

人魚 誰もいないの？

そこには誰もいない。

人魚 誰がいるの？

船乗り 誰かがいる

人魚 誰がいないの？

船乗り 誰かがいない

人魚 誰もいないの？

そこには誰も、

人魚 誰かがいるの？

船乗り 誰かがいる

人魚 誰かがいないの？

船乗り 誰かがいない

人魚 誰？

船乗り 誰？

人魚 誰？

本当に誰もいないのだろうか。

人魚 そこに座って

船乗り あなたはそこに座っていますか

人魚 わたしはそこに座れません

船乗り あなたはどこに座れますか

人魚 あなたの座っていないところ

船乗り どこ

船乗り、闇を泳ぐ。

船乗り あなたはそこに立っていますか

人魚 わたしはここにいます

歌歌い あなたはそこにいます

船乗り ぼくはここにいます

歌歌い きみはそこにいます

人魚 そこに川が流れています

船乗り どうして

人魚 雨が降ったから

船乗り そこに川が流れていますか

人魚 そこに川が流れています

船乗り 本当に？

人魚 言葉をつぐこと

船乗り そこに川が流れています

人魚 川は高いところから低いところへ流れていく

船乗り 川は落ちていけないのか

人魚 川は流れるもの

船乗り どうして

人魚 始まりと終わりが無いから

船乗り 始まりは何ですか

歌歌い 明日みんながなくなってしまうこと

船乗り 終わりは何ですか

歌歌い 明日みんながなくなってしまうこと

人魚 ずっとそこにあるもの

歌歌い 昨日も一昨日も

船乗り ぼくは始まりですか

歌歌い 三日

人魚 あなたは一人です

歌歌い 四日

船乗り ぼくは終わりですか

歌歌い 五日

人魚 あなたは一人です

歌歌い 六日

船乗り あなたは一人ですか

歌歌い 七日

人魚 わたしは二人です

歌歌い 高いところはどこにありますか

人魚 わたしは二匹です

歌歌い 低いところはどこにありますか

人魚 わたしは二つです

歌歌い そこから約一億五千万キロメートル

船乗り ぼくも一人です

人魚 わたしは一人ですか

船乗り いっしょに船へ乗りましょう

人魚 船？

船乗り 遠くへ人を乗せていくもの

人魚 わたしは泳ぎます

船乗り ぼくは泳げません

人魚 わたしは泳ぎます

船乗り ぼくは船乗りです

人魚 そこから落ちてしまったもののかを知っていますか

船乗り 落ちてしまったものとは何でしょう

人魚 わたしの手が落としてしまったもの

落とし子 ぼくは何も知らない

人魚 魚

落とし子 ぼくは何も

人魚 身がなくなっている

船乗り わからない

人魚 もう泳げない？

船乗り ただぼくがそこにいたということ

落とし子、後ろをむく。

人魚 わたしがそこにいないことを

船乗り 悲しみはどこに落ちていますか

人魚 悲しみはみんなといっしょにそこで

船乗り そこで

人魚 いっしょに

船乗り いっしょに

人魚 みんなと

船乗り 悲しみはどこに落ちていますか

人魚 あの日は悲しいですか

船乗り もう忘れました

人魚 あそこは悲しいですか

船乗り もう忘れました

人魚 ぼくらは悲しいですか

船乗り もう忘れました

人魚 そこは悲しいですか

船乗り ずっと覚えています

歌歌い わたしたちはどこからきましたか

わたしたちはどこへむかいますか

船乗り ぼくらは

歌歌い わたしたちは流されない

わたしたちは流れない

船乗り ずっとそこにいる

歌歌い 雨

人魚 悲しんでくれますか

落とし子 ぼくがそこにいないことを

悲しんでくれますか

人魚 ただあなたがそこにいないということ

落とし子、沈黙する彼らを見ている。

船乗り、地面へ手を下ろす。

さおが倒れる。

二人、水を掻いてみる。

もうそこに水はなく、

二人、空を切ってみる。

その手は空を切るばかりである。

一人、手を下してみる。

今日は何も誰も起きないのだろうか。

人魚 地面をける

船乗り、後ろをむく。

人魚 足はありますか？

船乗り 人だから

人魚 だから

船乗り あります

人魚 人でないなら

船乗り 人でなくともだいたいものには足がある

人魚 もの

船乗り ひとりで立つことのできないものことです

人魚 たとえば

船乗り ぼくとか

人魚 あなたは人だから

船乗り だから彼らには足がある

人魚 彼らとは誰ですか

船乗り 言葉をなくしたもののことです

人魚 どうして言葉をなくすのですか

船乗り 言葉ではどうにもならないことがあった

船乗り、遠くを見つめる。

人魚、遠くを見つめる。

人魚 今日日は日が高いですね

船乗り どうしておなじことを口にするのですか

人魚 何もなくなってしまうたから

船乗り きみも

歌歌い ぼくも

人魚 わたしも

歌歌い あなたも

人魚 何もない日は

船乗り ぼくは何もなくしていない

人魚 こうして見下ろしてもらうの

落とし子 ぼくも何もなくしていない

人魚 わたしはあの日を見上げている

船乗り ぼくは彼女を見下ろしている

人魚 一度でも傾いてはいけない

一度でも傾いてしまえば

落とし子 あの日 あそこでぼくらが「あ」った

落とし子、傘を差す。

一瞬。

光が過ぎり、あの日が――

落下する。

衝突する。

膨張する。

破裂する。

飛散する。

吸着する。

浸透する。

分散する。

混濁する。

沈殿する……。

鳥・蛇 雨の日はこうして皮を被るの

いっしょにそこへ落ちないため

人としてそこに居坐るため

落とし子 あの日

日が落ちようとしている。

落とし子 ぼくは わたしは

人のかたちとなって
ぼくとなり わたしとなり
きみとなり あなたとなり

そこは小さな居場所。

落とし子 ぼくらはそこに「い」る

生きているものがそこに立っている。

落とし子 ぼくらはそこに「あ」る

生きていたものがそこで眠っている。

落とし子 どこよりも遠くにあるもの

はじまりとおわりを同じにする一本の直線。

落とし子 「い」の「つ」さきにあるもの

こことあそこを分かち、そこに引かれている。

落とし子 ぼくはどうにも

彼らには到底はかれないもの。

落とし子 一つにはならなかったけれど

そこは小さな居場所。

あの日は雨が降っていた。

落とし子 あの日 あそこで

一本の直線がゆがむ。

こことあそこを分かたれず、蛇行し、そして。
そこはいつしかの底。

あそこで日が落ちないままでいる。
こどもだったものもおとなだったものも。

みんながいた遠いところ。
そこに綿のような雲が広がっている。
そこへ。

あの日は雨が降っていて。

誰かの言葉が地面を伝う。
遠くからそれは落ちてくる。
そこというには遠すぎる、あそこから、それは落ちてくる。
落とし子、そこに立っている。
いつの日か、雨はそこへ降っていた。
落とし子、水浸しになっている。
はじめからそうなっていたのか、雨のせいなのか、誰にもわからない。
でも、その手には傘が一本ある。

幕